

ほうじ  
法事といえ、現在ではご先祖さまや亡き方の追善供養の法要のことをいいます。  
しじゅうくにち いっしゅうき さんかいき  
ですから、四十九日や一周忌、三回忌などの仏事が法事であると理解してよいで  
しょう。

また、追善供養の追善とは、読んで字のごとく「善いこと」をあとから「追う」  
こと。この善事を積む功德は、生きている自分のためではなく、亡きご先祖や亡  
き父母などのためです。お経をあげたり、お燈明やお花やお香を供えるのも、追善  
供養として大切な事です。

では、なぜ法事を営まなければならないのでしょうか。

こう質問されて即答できる人は少ないかもしれません。しかしその答えは「ご先祖  
さまとは何か」にあります。

当たり前かもしれませんが、ご先祖さまがいるからこそ私たちがいるのです。誰に  
でもご先祖さまがおり、その数は時代を遡れば数えきれません。そのご先祖さま  
のうち一人でもいなければ、今の自分は存在していません。

このことに気づくならば、ごく自然にご先祖さまを敬う気持ちが生まれてくるの  
です。

自分にとって最高のおかげさまは、まさに、亡き父母や祖父母です。

その最高のおかげさまを失った悲しみはまさにこの世の無常を表しております。  
そしてその悲しみを癒すには時間がかかります。

法事の中に百ヶ日というものがありますが、これは別名、卒哭忌といい、なげき  
悲しむことから卒業するということですが、かけがえのない方との別れから百日すぎ  
ても悲しみを癒すことはできないかもしれません。

だから私たちは法事を営むことによって、亡き方を想い、悲しみを少しずつ癒して  
いくのではないのでしょうか。

法事をはじめお盆やお彼岸などの先祖供養は、故人の冥福を祈ることと、子孫を  
見守ってくれていることに対する感謝の心の表現といえます。

私たち日本人の生活は、先祖供養と深く結びついてきました。ご先祖さまを供養す  
ることによって、自分は生かされているということに気づくのです。

在りし日の故人を想い、その成じょうぶつ 仏を願って営む法事は、ご先祖や亡き父母への報恩感謝の心を表すことなのです。

法事を営むことによって、私たち自身が仏教と出会い、学ぶことができたならば、それも法事のひとつの大きな意義となるでしょう。法事という仏事を通して仏さまとのご縁が生まれる、得がたい機会でもあるのです。